

●二人で味わう古典和歌(81)

世の中を何に喩へむ朝開き漕ぎ去にし舟の跡なきごとし

沙弥満誓

『万葉集』巻三「雑歌」の一首。

「世の中を何にたとえたらよいだろう。それは、朝早く港を漕ぎ出して消え去って行った舟の跡が、なにもないようなものだ。」

二句切れの自問自答のスタイル。葛藤や諦念を超えた深い無常観がうかがわれる。

沙弥満誓は、俗名・笠麻呂。美濃国の長官など長い官吏生活を経て出家した人。このときは、造筑紫観世音寺別当であった。そして、この歌のすぐ前には大伴旅人の「酒を讀むる歌」十三首があり、満誓はその宴の主客の一人でもあった。はたして、同じ宴席での一首だったのだろうか。

「讀酒歌」は「驗なきものを思はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし」(この人生、甲斐のない物思いなどに耽るより、一杯の濁り酒でも飲む方がましだろうよ)で始



まり、後半には「世の中」「この世」「来む世」などの言葉がやたらに出てくる。

満誓は、世を憂う気分を満たした旅人の連作への反歌のようにこの歌を披露して、宴を締めくくったのか。あるいはまた、返歌として後日送ったのか。いずれにしても、ここにこの歌があることの、不思議な味わいに立ち止まる。

ところで、勅撰和歌集『拾遺集』には、少し修正された形で収録されている。

世の中を何に喩へむ朝ばらけ漕ぎ行く舟の跡の白波
以後、『古今六帖』や『和漢朗詠集』にもこの形で収録され、無常を詠んだ歌の代表歌として長く愛誦される一首になった。鴨長明の『方丈記』には「もし跡の白波に身をよする朝には、満誓沙弥が風情をぬすみ」の言葉が見え、また芭蕉の「寒夜の辞」には「あさばらけ漕行船のあとのしら浪に」の言葉がある。すなわち、「跡の白波」が無常観のキーワードになったのだ。

茫漠とした余韻たゆたう『万葉集』の原形が、わたしには捨て難く思われるけれど。
(小島ゆかり)